資料３－３

清須市いのちを支える支援ワーキング会議報告書

1.　日　時　令和６年１０月１０日（木）午後２時から３時３０分
2.　場　所　南館３階　大会議室
3.　参加者　１５名
キリンビール株式会社名古屋工場、三菱重工サーマルシステムズ株式会社、西春日井広域事務組合消防本部、尾張断酒会、特定非営利法人太陽　七彩公房、ゲートキーパー、傾聴ボランティアみみとも、清須市社会福祉協議会　障がい者サポートセンター、清須市社会福祉協議会　地域福祉係、清須市社会福祉協議会　地域包括支援センターさわやか、愛知県清須保健所　健康支援課、清須市役所（学校教育課、社会福祉課、高齢福祉課、児童保育課）
4.　内容
1）あいさつ
2）自殺対策計画と清須市の自殺の現状について
3）意見交換（各所属関係機関の取り組み紹介）
4）グループワーク（事例検討）
（事例概要）７０歳代女性独居。足が悪く、ヘルパーを利用している。娘と息子がいるが娘との関係性は悪く、そのストレスから食事は１日１食のみである。娘には不登校の子どもがいる。息子との関係性は良く、同居を提案されているが息子は遠方に住んでおり、住み慣れた土地から離れたくないという思いから、同居を断っている。地域のコミュニティには参加したくない。
（１グループ）本人とつながっているのがヘルパーしかいない。ヘルパーから息子、娘に本人の状態を伝えることが必要。また、息子や娘は介護が難しい状態であることをヘルパーに伝え、本人が住み慣れた地域で暮らし続けるために必要なサービスを入れることが必要になる。
（２グループ）本人がどうしたいのか把握できていない状況であるため、傾聴をすることが重要。行政が本人に連絡を取る、じっくり話を聞いてほしいということであれば傾聴ボランティアを利用してもらう、必要時傾聴ボランティアから行政につなげる。
（３グループ）配食サービスを利用し、買い物の負担を軽減するとともに安否確認をしてもらう。医療情報キットを活用してもらうことで万が一に備えておく。本人のニーズに合った地域のコミュニティを紹介する。娘の負担感も大きいため、娘自身に相談窓口を利用してもらう。そこで社会資源について、情報提供する。
5.　まとめ
顔の見える関係づくりをする機会となり、かつ、各機関の役割を整理することが出来たことにより、対象者に合った社会資源をつながった先の機関が紹介しやすくなった。一つの機関のみでは支援が難しい場合も複数の機関が携われば、様々な観点から対象者をアセスメントし、アプローチできる。今後も各機関が持つ資源を最大限活用し、対象者及び周囲の方へ介入することでそれぞれが抱える生きづらさや負担感を減らし、自殺対策に努めたい。